

## 複合動詞 V-カケルと V-カカルの意味と形式

### 要旨

複合動詞 V-カケル/カカルには、語彙的なものと、アスペクトを示すものがある。語彙的な V-カケル/カカルとアスペクトを示す V-カケル/カカルは同一語形をとるが、文法的性質に違いがある。このうち、アスペクトを示す場合について、V-カケル/カカルの相違点を明らかにすることが本論文の目標である。V-カケル/カカルは基本的には互換性があるが、意味に違いがあるということはこれまでも指摘されている。しかし、先行研究で述べられているのは、あくまで表面的な意味の違いにとどまっている。そこで本論文では、アスペクトの V-カケル/カカルに共通する「未遂」の意味に注目し、接続する動詞の継続性、意志性という条件の違いによって、どのような意味の変化が表われるかを観察した。その結果、V-カケル/カカルは動作がゴールに達していないという未遂を示す点で共通しているが、そのゴールを V-カケルは動作の完了の時点に設定し、V-カカルは開始の時点に設定するという根本的な性格の違いがわかった。

言語学・応用言語学専攻

1LT03093G

平成 15 年入学

富田起世

平成 19 年 1 月提出

## 目次

1. はじめに .....	1
2. アスペクトを示す V-カケル/カカルと語彙的な V-カケル/カカル .....	2
2.1. 複合動詞 V-カケル/カカルの二分法 .....	2
2.1.1. アスペクトを示す場合と語彙的に用いる場合 .....	2
2.1.2. 影山 (1993) による分類 .....	3
2.1.3. 姫野 (1999) による分類 .....	4
3. 語彙的な V-カケル/カカル .....	7
3.1. 落下接触 .....	7
3.2. 依拠接触 .....	7
3.3. 志向接触 .....	8
3.4. 心理的志向 .....	9
3.5. 志向移動 .....	9
3.6. 把捉 .....	9
3.7. 通過遭遇 .....	9
3.8. 態度決定のカカル .....	10
4. アスペクトを示す V-カケルと V-カカル .....	11
4.1. 継続動詞とカケル/カカル .....	11
4.1.1. 意志性の動詞 .....	12
4.1.2. 無意志性の動詞 .....	12
4.1.3. 文脈による変化 .....	13
4.2. V-ハジメルや V-ダスと V-カケルの相違点 .....	14
4.3. 派生名詞「カケ」 .....	16
4.4. 瞬間動詞とカケル/カカル .....	16
4.4.1. 意志性の動詞 .....	17
4.4.2. 無意志性の動詞 .....	18
4.5. アスペクトの V-カケルと V-カカルの混同の問題 .....	19
5. おわりに .....	21
謝辞 .....	22
参考文献 .....	22

## 1. はじめに

「かける」「かかる」は、本動詞として多くの意味を持ち、使用頻度の高い動詞である。それらが動詞連用形に接続したときの複合動詞 V-カケル/カカルも、前項動詞との組み合わせによりさまざまな意味で使用され興味深い。

本論文では、特に、補助動詞的に用いられ、動詞の動作相アスペクトを示す V-カケル/カカルについて考察する。(1), (2)は、アスペクトを示す V-カケル/カカルの典型例である。

- (1) a. セーターを編みかけた。  
b. セーターを編みかかった。
- (2) a. 電柱にぶつかりかけた。  
b. 電柱にぶつかりかかった。

本論文で注目するのは、このような文における V-カケルと V-カカルの意味の違いである。一般的には、(1), (2)のカケルとカカルには互換性があると説明され、また、日本語話者が発話する際も、カケルとカカルどちらを使うかは問題にならないことが多い。ところが、感覚的には V-カケルと V-カカルは全く同じとはいえず、たとえば(1)では、(1a)のほうが(1b)よりも「編む」という動作が進んでいるような印象を受ける。また(2a)と(2b)では、(2b)のほうが「危ないところだった」という気持ちが強いという印象を受ける。

アスペクトを示す V-カケルと V-カカルの相違点については、既に佐治 (1993) や姫野 (1999) でも言及されているが、これらの先行研究は、表出している意味や形式の違いを指摘するだけに止まっており、V-カケルと V-カカルの根本的な性質の違いにまでは踏み込んでいない。しかし、上に述べたような意味の違いが形式に表れている以上、V-カケルと V-カカルには何かしらの性質の違いがあるはずである。そこで本論文では、アスペクトを示す V-カケルと V-カカルの相違点を明らかにしたい。

まず、アスペクトを示す V-カケル/カカルとそれ以外の語彙的に使われている複合動詞 V-カケル/カカルの区別を明確にする。その上で、アスペクトを示す V-カケル/カカルを、前項動詞の継続性・瞬間性、意志性・無意志性を表す場合で分類し、それぞれにどのような意味が表われるか、そしてそれは何故なのかを考察する。

## 2. アスペクトを示す V-カケル/カカルと語彙的な V-カケル/カカル

V-カケル/カカルには、アスペクトを示す場合と、語彙的な複合動詞として使われる場合がある。(3)は、複合動詞 V-カケル/カカルがアスペクトを示す例であり、(4)は、V-カケル/カカルがより慣用的に使われている、語彙的な複合動詞の場合である。

- (3) 電柱にぶつかりかけた。 / 火が消えかかっている。  
(4) 太郎は花子に話しかけた。 / 次郎が太郎に殴りかかった。

両者は同一語形で表れる場合もある。

- (5) a. 生徒の冗談に先生も笑いかけたが、すぐに真面目な顔に戻った。  
b. 先生が迷子の子どもに優しく笑いかけた。

(5a)は前者のアスペクトを示す場合で、(5b)は後者の語彙的な場合である。これらは見た目の形式は同じであるが、意味が異なり、また文法的にも異なる性質を持つ。

本稿で主に議論の対象とするのはアスペクトを示す V-カケル/カカルであるが、まず本章では、語彙的な V-カケル/カカルを、アスペクトを示す V-カケル/カカルと明確に区別しておきたい。

### 2.1. 複合動詞 V-カケル/カカルの二分法

ここでは、複合動詞 V-カケル/カカルを、文法的な性質によって、アスペクトを示す場合と語彙的に用いられる場合に分類する。

#### 2.1.1. アスペクトを示す場合と語彙的に用いる場合

(5)は、いずれも複合動詞 V-カケルを使った例文であるが、(5a)のカケルはアスペクトを示し、(5b)のカケルは語彙的に用いられたものである。

- (5) a. 生徒の冗談に先生も笑いかけたが、すぐに真面目な顔に戻った。  
b. 先生が迷子の子どもに優しく笑いかけた。

(5a)は「笑いそうになった(あるいはちょっと笑ってすぐにやめた)」という意味であり、(5b)は「子どもに向かって笑う」という意味である。それぞれに尊敬のル・ラルを加えると、面白い語順の違いが観察される。

- (6) a. 生徒の冗談に先生も笑われかけたが、すぐに真面目な顔に戻った。  
b. 先生が迷子の子どもに優しく笑いかけられた。

アスペクトを示す(6a)はカケルの前に尊敬のラルが現れるが、語彙的複合動詞である(6b)はカケルの後に尊敬のルが現れるのである。

また、(5)のカケルをカカルに言い換えてみると、容認度に違いが生じる。

- (7) a. ?生徒の冗談に先生も笑いかかったが、すぐに真面目な顔に戻った。  
b. \*先生が迷子の子どもに優しく笑いかかった。

多少ニュアンスの違いがあるものの、基本的にはカケルをカカルに言い換えることが可能である。それに対して、語彙的複合動詞の場合には、「『人に笑いかかる』という言葉はない」という語彙知識による制限で、カケルをカカルに言い換えることは決してできない。

さらに、語彙的複合動詞の V-カケル/カカルとアスペクトを示す V-カケル/カカルは、(8)のように同じ文に並んで現れることもある。

- (8) 蝶々が飛んでいたので思わず追いかけてしたが、仕事があるので我慢した。

(8)でも(6)と同様に、語彙的複合動詞のカケル/カカルがアスペクトよりも前項動詞に近い位置に出現する。

この三つの点から、アスペクトを示す V-カケル/カカルと語彙的な V-カケル/カカルは見かけの語形は同じであっても、文法的には異なる性質を持っているということがわかる。

複合動詞 V-カケル/カカルは、自他の対応があり、しかもアスペクトの用法と語彙的複合動詞の用法の両方に数多く表れるという、意味が多岐にわたる複合動詞である。この特徴は、複合動詞 V-カケル/カカルの分析を難しくする一因にもなっているが、同時に、この複合動詞特有の面白い特徴でもある。

#### 2.1.2. 影山(1993)による分類

このように、複合動詞を文法的な性質によって二分類する方法は、影山(1993:74-97)でも提案されている。影山(1993)では、意味的制限があるために生産性が低く、組み合わせが自由ではない複合動詞を「語彙的複合動詞」、意味的制限がないため生産性が高く組み合わせも融通がきく複合動詞を「統語的複合動詞」と名付け、それぞれの文法的性質の違いを分析した。そして、文法的性質の違いの原因はその生成過程の違いにあり、語彙的複合動詞は語彙部門で生産され、統語的複合動詞は統語部門で生産されると指摘してい

る。

本論文で言う「アスペクトを示す V-カケル/カカル」は「統語的複合動詞」に、「アスペクトを示さない語彙的な V-カケル/カカル」は「語彙的複合動詞」に対応する文法性質を持つ。ただ、語彙的複合動詞の V-カケル/カカルが必ず語彙部門で形成されて、アスペクトとしての用法が必ず統語部門で形成されるという点に関しては、少し疑問がある。

例えば、語彙的な V-カケルを、相手に向かって何らかの意思伝達を行う意味で「笑いかける」や「語りかける」などと使う場合がある。

(9) \*コンサートでファンに歌いかけた。

これらの V-カケルには語彙的制限があって、「人に歌いかける」という言葉は無いので、(10)のように「ファンに向かって歌いかける」という言い方は容認できない。しかし、特殊な設定、たとえば歌が台詞の一部であるミュージカルの舞台上などで、「歌う」という動作が当たり前のコミュニケーション手段として認められている場合を想定したらどうだろうか。

(11) 王様がお妃様に優しく歌いかけた。

この文脈ならば、容認度はかなり上がるのではないかと思う。

語彙的な V-カケル/カカルは、もともとは統語部門で生成されていたのが、複合できる前項動詞の例が意味的制限で非常に少なかったために、慣用句のように使われるようになり、語彙的な結びつきが強く切り離しにくくなって、その結果現在では語彙的複合動詞の性質を示しているのではないだろうか。語彙的な V-カケル/カカルの生産性がかなり低いことは事実だが、(11)のように新しく組み合わせて作れないこともない。この「歌いかける」は統語部門で形成しているといえないだろうか。

### 2.1.3. 姫野 (1999) による分類

ここまで、複合動詞 V-カケル/カカルには、アスペクトを示す場合と語彙的複合動詞である場合があると述べたが、複合動詞 V-カケル/カカルがそのように二分類できるということは、実は姫野 (1999:121-142) で既に指摘されている。

姫野 (1999) の論文では、2.1.1 節で論じたような文法的な側面よりも意味的な側面に重点をおいて、アスペクトを示す場合を「始動を表すカケル/カカル」、語彙的複合動詞である場合を「指向を表すカケル/カカル」と呼んでいる。姫野 (1999) によると、それぞれの意味は以下である。

(12) 指向：対象に向かって何らかの動作・作用を及ぼす  
始動：動作・作用の始まり、あるいはその寸前の状態を表す

本稿で、あえて「語彙的な V-カケル/カカル」という呼び方をしたのは、アスペクトではない V-カケル/カカルをすべて「指向」という呼ぶことには少し問題があるからである。そこでこの節では、ここで言う「語彙的な V-カケル/カカル」と、姫野 (1999) のいう「指向」を表す場合の V-カケル/カカルの違いについて論じる。姫野 (1999) で指摘されている「指向」を表す V-カケル/カカルの下位分類をまとめると以下ようになる。

(13) 姫野 (1999) による「指向」を表す V-カケル/カカルの下位分類と例<sup>1</sup>

落下接触	落ちかかる	
依拠接触	もたれかかる	
志向接触	襲いかかる	もたせかける
心理的志向		吐きかける
志向移動		笑いかける
把捉		出かける
通過遭遇	通りかかる	見かける

さて、(13)のうち、落下接触・依拠接触・指向接触・心理的志向という4つのグループのカケル/カカルが動作の「指向」を表しているということは、問題がない。また、志向移動と把捉の二つの用法は、前の四つよりかなり慣用化が進んでいて用例が少ないが、やはり「指向」の意味であることは変わらない。

しかし、通過遭遇の用法に関しては異論がある。「通りかかった人」は、尊敬のラルをつけると「\*通られかかった人」ではなく「通りかかられた人」となるので、語彙的な V-カケル/カカルであることに違いはないのだが、動作の対象がはっきりしないので、「指向」という意味は薄い。

(14) 校門を通りかかった人にピラを配ってください。〔通過遭遇〕

「通っていない状態から通るという状態に無意志的に移行した」と考えると、むしろカカルがアスペクトとして用いられるときの意味と共通性があり、「指向」よりも「始動」の

<sup>1</sup>「取りかかる」は「仕事にかかる」という本動詞にかかるに接頭語がついた複合動詞で、同様の例は他にみられないので、例外として、ここでは除外した。

意味に近いといえる。このように、語彙的な V-カケル/カカルがすべて「指向」の意味を持つわけではないのである。

ところで、語彙的な V-カケル/カカルとアスペクトを示す V-カケル/カカルの意味の共通性については、森田（1977:155）に興味深い指摘がある。本動詞「かかる」は不安定な状態にある事物が安定した状態へ移ることであるので、V-カカルは動作・作用の相手 B を前提とする動詞に付くときは「動作の主体 A が対象 B に対して身をあずける」という意味や「A が B にぶつかってくる」意味になり、相手 B を前提としない動詞にカカルがつくと、「そのような動作や状態に移る」という意味になる、という指摘である。実際には V-カカルの意味はこの一般化よりも複雑に表れるものの、この指摘からは、複合動詞 V-カケル/カカルの成立の過程が想像できて興味深い。現在では文法的な性質が異なるアスペクトの V-カケル/カカルと語彙的な V-カケル/カカルも、もともとは同じ意味を持っており、使われるうちに徐々に慣用化が進んでいったのではないかと、という推測ができるのである。

「通りかかる」は、最初はアスペクトの V-カカルだったが、使用頻度が高いために慣用化して、通ルとカカルの結びつきが強くなり、語彙的な V-カケル/カカルの文法的性質を持つようになったのかもしれない。

### 3. 語彙的な V-カケル/カカル

語彙的な V-カケル/カカルとアスペクトを示す V-カケル/カカルの区別を明確にするために、この節では、姫野（1999）の先行研究に基づき、語彙的な V-カケル/カカルの細かい用法について述べる。

「水を浴びせかける」や「落ち葉が散りかかる」などに見られるように、語彙的な V-カケル/カカルの多くは本動詞「かける」「かかる」の意味をそのまま保ち、動作・作用の指向性を表す。しかし、語彙的な V-カケル/カカルの中でも、「通りかかる」や「見かける」のように、とくに使用頻度の高い例では、慣用化が進んで、もとの意味がほとんどわからなくなってしまっている。

#### 3.1. 落下接触

落下接触グループのカカルは、森田（1977:155）で指摘された、自立語の本義「波のしぶきがかかる」にみられる「主体が対象に向かってきて当たる」という意味だが、前項動詞がついて形成される複合動詞は、「下方に向かって」という意味に限定される。

(15) 葉が頭上に散りかかる。

前項動詞は「散る、落ちる、降る、（水滴が）垂れる」のように主体が下方へ移動するものと「崩れる、こごむ、倒れる、かぶさる、（布が）垂れる」のように主体上辺部で下方移動が起こるものがあるが、「下方への移動」という点において共通している。

(16) タンスの上からダンボール箱が落ちかかってきた。

また、このグループの複合動詞は前項動詞の動きがあってそれから対象に「かかる」という、前項動詞と後項動詞が「～して～する」という関係になっている。たとえば(16)の場合は、「ダンボールが落ちて、かかる」という「落ちる」の結果として「かかる」が起こる、という関係である。

#### 3.2. 依拠接触

依拠接触のカカルは、たとえば「屋根にはしごがかかっている」のようなカカルであり、「重さを対象にあずけて固定させる」という意味である。

(17) 柱に寄りかかって、立ったまま眠った。

前項動詞は「もたれる、寄る、しなだれる」などで、主体が対象に近づいていく、支えにするという意味特徴がある。後項動詞カカルはそれに、近づいて接触した状態にとどまるという意味を加える。

依拠接触グループでは、カカルとカケルは自他の対応をなしており、カケルは、自立語カケルの「重さを対象にあずけて位置を固定させる」の意味である。

(18) ホウキを壁に立てかけておく。

自動詞のV-カカルは「主体が対象に向かって動き接触する」という意だったが、V-カケルは他動詞なので、「主体が何かを対象に向けて動かして接触させる」のが基本の意味である。

### 3.3. 志向接触

志向接触のカカルは、意図を持って対象に向かうという意味を持つ。

(19) 庭に出たとたん、飼い犬がじゃれかかってきた。

(20) 大きなヒグマが彼に襲いかかった。

この場合のカカルと複合できる前項動詞は、(19)の「甘える、ふざける、じゃれる」のように好意的な意図を示す場合と、(20)の「襲う、挑む、切る、乗る(など)」のように攻撃的な意図を示す場合とに分かれ、攻撃的な意図を示す場合が多い。さらに、攻撃的な意図になる前項動詞は「襲う、挑む、攻める」のような攻撃性を既に意味に含むものと、「切る、蹴る、殴る」のようにもとの前項動詞の意味にあるのは攻撃の手段だけでV-カカルが複合することで攻撃的な意図を付加するものがある。

寺村(1969:47)は、格助詞「を」をとるものも、カカルと結合すると、複合動詞全体が「に」をとるようになると指摘している。

(21) 人を切る+かかる 人に切りかかる

志向接触グループにおいてもカカルとカケルは自他の対応をなしている。志向接触のカケルは、意図を持って対象に何かを向かわせる(かける)ことを表す。

(22) ロウソクに息を吹きかける。

前項動詞は「浴びせる、射る、投げる、着せる」などがある。依拠接触グループと志向接

触グループの違いは、接触が生じることによって何か対象に変化がみられることである。

### 3.4. 心理的志向

心理的志向グループのカケルは、「誘いをかける」の「かける」に近い意味である。依拠接触や志向接触のような物理的接触ではなく、相手に心理的に影響を及ぼし、変化を起こそうとする意味の複合動詞である。

(23) テレビを通じて全国へ呼びかける

複合する前項動詞には「いざなう、訴える」など既に働きかけの意味を含む動詞もあるが、「語る、問う、囁く」など言語上のコミュニケーションを表す言葉に「かける」で働きかけの意味をプラスする場合もある。

### 3.5. 志向移動

志向移動のカケルは「押しかける・攻めかける・出かける」の三例だけである。主体自身が目的をもってある場所に行くことを示す。

(24) 来日の情報を知って、多くのファンが空港に詰めかけた。

また、何か目的を持ってその場所に行くことを示すので、単に物理的な移動や短距離の移動には相応しくない。

### 3.6. 把握

把握は、対象をとらえようとする動きである。

(25) 野良犬がわたしを追いかけてきた。

(26) 駅前のコンビニで花子の母親を見かけた。

このグループは「追いかける・追っかける・見かける」の三例だけである。「追いかける」は意志が強調されているが、「見かける」は受動的な印象を受けるといったように、同じ把握用法でも意味は異なる。

### 3.7. 通過遭遇

通過遭遇グループも用例は少なく「さしかかる・通りかかる・来かかる」の三例だけである。

(27) 太郎が海辺を通りかかると、三人の子どもが亀をいじめていた。

「ちょうどその所にくる」という意味のカカルに接頭語のついた「さしかかる」と「通りかかる」「来かかる」が同様の意味で使われる。前項動詞の「通る、来る」は意志的な行為であるが、「かかる」と結合すると無意志的になるという、把握の「見かける」と同様の変化が見られる。

「さしかかる」「通りかかる」「来かかる」は、ある地点を指向している途中であることを表す複合動詞であり、しかも「通りかかった」次の展開として何か新しい局面が発生することを前提としている言葉なので、「彼が通りかかった。」で文章が締めくくられるということはない。必ず、「通りかかって、何かが起こった」ということが語られる。この「新しい局面の発生を前提とする」という性質は、次の節で論じるアスペクトのV-カケル/カカルにも通じるところがある。

### 3.8. 態度決定のカカル

複合動詞ではないが、カカルには、「～してカカル」と「て」の形に続いて補助動詞的に使われる場合があり、この用法を態度決定の用法と呼ぶ。

(28) 母は父を頭から疑ってかかっている。

「仕事にかかる」の本動詞カカルに通じる用法であるが、たとえば「なめてかかる」などでは、最初からそういう態度ではじめる、といった意味になるので、どちらかといえば姫野(1999)のいう「始動」の意味に近いかもしれない。これは、カカルだけに存在し、カケルには存在しない用法である。また、このときのカカルは慣用語的に使用されており、補助動詞のような文法的機能はない。

## 4. アスペクトを示すV-カケルとV-カカル

アスペクトとして使われるカケル/カカルは、ある動作がどの時点をもって実現であるかという「ゴール」に到達する手前であるという未遂の意味を表す働きをする。姫野(1999)では本論でアスペクトを示すV-カケル/カカルと呼んでいるものを、「始動」を示す場合のV-カケル/カカルと呼んだが、重要なのは「始動」より「未遂」の意味である。

アスペクトを示すV-カケル/カカルは、補助動詞的であり、前項動詞のとり格助詞がそのまま複合動詞全体の格助詞となる。また、全体は継続的・無意志的な意味を持つ動詞になる。カケルとカカルは本来の他動詞と自動詞の対立は保っておらず、とくに瞬間動詞につくときは互換性が高い。姫野(1999)では、V-カケルが意志的・他動詞的・継続動詞と結合しやすく、V-カカルは無意志的・自動詞的・瞬間動詞と結合しやすいことが指摘されている。

V-カケルとV-カカルの違いは、動作の実現の時点をも、V-カケルは動作が完了した時点に設定し、V-カカルは動作が開始した時点に設定することである。そのため、V-カケルのほうがV-カカルよりも動作が進行しているような印象を与える。V-カケルは動作を主観的・継続的に捉えて、動作が実現に向かっていく段階であることを踏まえて、動作の中断を示す傾向がある。それに対してV-カカルが示す動作は客観的・瞬間的な描写であることが多い。

本節ではアスペクトのV-カケルとV-カカルが継続動詞につく場合と瞬間動詞につく場合にわけて、両者にどのような意味の相違が表れるかを観察する。

### 4.1. 継続動詞とカケル/カカル

アスペクトのV-カケル/カカルは、継続動詞につく場合、その動作が実現して中途まで行われたという意味を示す。

(29) 絵を描きかけた。

金田一(1976)では、これを「始動態」のアスペクトであるとしている。また、始動態が表れるのはV-カケルだけで、V-カカルには始動態は表れないと指摘した。始動態は日本語の動作相アスペクトのひとつで、他にはV-ハジメルやV-ダスなどが始動態にあたる。

始動態の意味が表れるのは、V-カケルが継続動詞につくときに限られている。瞬間動詞につくときは、その動作が実現する一歩手前であるという意味になる。

(30) 交通事故で死にかけた。

金田一（1976）ではこれを「将現態」と呼んで区別し、V-カケルは継続動詞につくと始動態を示し、瞬間動詞につくと将現態を示すと指摘した。

ここでは、(29)のように V-カケル / カカルが継続動詞につく場合について考える。アスペクト V-カケル / カカルが瞬間動詞につく場合については 4.2 節で論じる。

#### 4.1.1. 意志性の動詞

始動態は、継続動詞の中でも意志動詞、とくに開始と完了がはっきりしている意志動詞によく表れる。

- (31) a. レポートを書きかけたが、途中で止まってしまった。  
b. 宿題の提出日は9月1日だから、お盆までにはやりかかないと間に合わない。

V-カケルは動作が完了した時点にそのゴールを設定する。これらの例では、レポートを全部書いてしまうこと、宿題を全部仕上げるのが動作のゴールであり、V-カケルはそれらの動作が未遂であるということを示している。

- (32) a. \*レポートを書きかかったが、途中で止まってしまった。  
b. \*宿題の提出日は9月1日だから、お盆までにはやりかからないと間に合わない。

V-カケルと異なり、V-カカルは動作の開始した時点がゴールにするので、この例文では V-カケルを V-カカルに言い換えることはできない。

#### 4.1.2. 無意志性の動詞

同じ継続動詞でも無意志動詞の場合は、V-カケルの動作の完了の時点が曖昧になってしまう。

- (33) a. 電話のベルが鳴りかけたが、切れてしまった。  
b. 一時は雨が降りかけたが、なんとか運動会を中止せずにすんだ。

(33)は(31)と同じで始動態を示しているが、(31)と比べて動作の継続時間が短く感じられると思う。これは、無意志動詞では動作の完了の時点がはっきりしない（電話のベルが全部鳴ってしまう、とか、雨が全部降ってしまう、とはふつう言わない）ので、動作のゴールが「一定時間その動作が続くこと」に設定されてしまうためである。一定時間その動作が続くことがゴールで、それに達していないという意味であるので、「きわめて短い時間だけその動作が起こった」という意味になる。無意志動詞の場合は、V-カケルを V-カカルに

言い換えても、(32)よりも容認度が上がる。

- (34) a. 電話のベルが鳴りかかったが、切れてしまった。  
b. ?一時は雨が降りかかったが、なんとか運動会を中止せずにすんだ。

(34b)では「降りかかる」という語形が語彙的な V-カカルにも表れるので、ぱっと見では判断に迷うかもしれないが、動作が開始して途中まで進行したという意味で解釈すること自体は可能である。(32)よりずっと容認度は高い。このカケル / カカルは始動態という名前で呼ばれてはいるが、「始動」というよりもむしろ「未遂」の意味に重点が置かれているように感じる。

#### 4.1.3. 文脈による変化

意志性の継続動詞の V-カケルでも、文脈から、動作の実現の時点がその動作の完了ではない場合には、「動作が開始して中途である」という始動態の意味と、「動作が実現する手前である」という将現態の意味、どちらにも解釈可能である。

- (35) a. 課題図書を読みかけたが、途中で居眠りしてしまった。  
b. 新聞を読みかけたが、やっぱりテレビを見た。

(35a)の文脈では読むという動作が開始しているといえるが、(35b)では、新聞を読むという動作を全く行っていないという解釈も可能である。金田一（1976b）や姫野（1999）では、このとき継続動詞「読む」が一時的に瞬間動詞として使われ、将現態を示すとされているが、ではなぜそのようなことが起こるのかまでは論じられていない。この原因について、筆者は、それぞれの文脈で「読む」という動作の設定しているゴールの時点が違うためであると考えた。(35a)の「課題図書を読む」は、その本を全部読んでしまった時点にゴールを設定しており、最後まで読まないで達成したことにはならない。それに対して(35b)の「新聞を読む」は、選択肢として「新聞を読む」と「テレビを読む」のうち新聞のほうを選択した時点にゴールを設定しているので、新聞を全部読んでしまわなくても、テレビより新聞を選んだ時点で達成されてしまうのである。もちろん新聞を実際に読みはじめて中断したと解釈することは可能だが、その場合でも、(35b)は(35a)よりも読んだ分量が少ない感じになるのではないだろうか。

カケルが示すのはゴールに到達していないという意味であるから、(35a)は「最後まで読んでいない」すなわち「途中で読んだ」という始動態の意味になり、一方(35b)は「新聞を読むことを選んでいない」すなわち「寸前でやめた」という将現態の意味にもなりえるのである。

ここで、(35)のカケルをカカルに置き換えたのが以下の(36)だが、(36b)に比べて(36a)はかなり不自然になる。

- (36) a. ??課題図書を読みかかったが、途中で居眠りしてしまった。  
b. 新聞を読みかかったが、やっぱりテレビを見た。

これは、さきほども述べた通り、(36a)の文脈では、動作の完了の時点ゴールを設定しているためである。V-カカルは動作の完了の時点ゴールにすることができない。「途中まで読みかける」とはいえても、「途中まで読みかかる」とは普通は言わない。もし「本を読みかかる」と言うとしたら、「読みかける」のときより読んだ分量がかなり少ないときに限ると思う。カケルのほうがカカルよりも動作が進んだ時点を示すのである。それに比べて、(36b)は V-カカルの容認度が高い。これは(36b)の文が動作の開始の時点ゴールを設定しているためである。

金田一(1976b)では、将現態には V-カケルと V-カカル両方の形式が表れるが、始動態に表れるのは V-カケルのみであるとされている。たしかに、意志性の継続動詞で動作の開始と完了の時点がはっきりしている場合は、V-カカルは表れず、V-カケルだけが表れるようだ。しかし、非意志性の継続動詞や、文脈上動作の開始と完了の時点がはっきりしない場合は、V-カカルも始動態の意味で表れることができる。

ただし、アスペクトのカケルとカカルは、実際の発話では混同されがちであることに注意が必要である。カケルとカカルは語形も意味もとても似ているので、始動態の文脈で「読みかかった」と発話しても、すわりが悪い感じはするが、意味は通じてしまう。カケルとカカルの混同の問題については、また後でもう一度検討する。

#### 4.2. V-ハジメルや V-ダスと V-カケルの相違点

ここまで述べてきた通り、V-カケルは継続動詞に接続すると始動態のアスペクトを示す。金田一(1976b)で提案された始動態のアスペクトには他に、V-ハジメルと V-ダスがある。

- (37) a. 蛍の光を歌いかけたが、途中で歌詞がわからなくなった。  
b. 蛍の光を歌いはじめたが、途中で歌詞がわからなくなった。  
c. 蛍の光を歌いだしたが、途中で歌詞がわからなくなった。

V-カケル、V-ハジメル、V-ダスは意味が似ているので言い換えることができることも多いが、意味にはそれぞれ違いがある。

大きな違いは、V-ハジメルや V-ダスは動作の開始を示しているが、V-カケルはむしろ、動作の開始自体よりも、その動作が中途であることを重点をおいている点である。姫野

(1999)でも、V-ハジメルや V-ダスと V-カケルの違いについて「同じ始動を表すといっても、V-ハジメルと V-ダスはその動作・作用が続行し、終了に至ることを予想できる。これに対して V-カカルと V-カケルは中断や中止が前提とされることが多い」と指摘がある。

- (38) a. ??太郎が蛍の光を歌いかけたので、次郎も途中から一緒に歌った。  
b. 太郎が蛍の光を歌いはじめたので、次郎も途中から一緒に歌った。  
c. 太郎が蛍の光を歌いだしたので、次郎も途中から一緒に歌った。

(38a)のように動作がそのまま続行する文では、カケルは不自然である。

また V-ハジメルは意志をもってその動作を行うときに使えるが、V-ダスは V-ハジメルよりも自然ななりゆきという感じで使われ、意志性が弱い。また、V-カケルは最初に指摘した通り全体では無意志動詞になる。そのため、可能のル・ラルがつくときなど、意志性の高さが要求される文脈においては、容認度に差が出る。

- (39) a. \*今が6時半だから、7時には食べかけられる。  
b. 今が6時半だから、7時には食べはじめられる。  
c. ??今が6時半だから、7時には食べだせる。

さらに、前述の通り、V-カケルがはっきりと始動態の意味を示すのは意志性の継続動詞で動作の開始と完了の時点がはっきりしている場合だけだが、V-ハジメルや V-ダスは動作の完了の時点がはっきりしていないときや、非意志動詞のときにも使える。さらに、未来の表現でも、V-ハジメルや V-ダスは使えるが、V-カケルは使えない。

- (40) a. \*夜半過ぎには、雪が降りかけるでしょう。  
b. 夜半過ぎには、雪が降り始めるでしょう。  
c. 夜半過ぎには、雪が降りだすでしょう。

瞬間動詞については、V-ハジメルと V-ダスは複数主語のときに限り始動態を示すが、V-カケルは複数主語をとることはできない。

- (41) a. \*外灯がぼつぼつと点きかける。  
b. 外灯がぼつぼつと点きはじめる。  
c. 外灯がぼつぼつと点きだす。

これらの観察から、V-カケルは単に動作の開始を示すのではなく、その動作が中途である

ということも同時に示すことがわかる。

同じ始動態でも、V-ハジメルや V-ダスは単純に動作の開始を示すが、V-カケルは動作の完了までを視野に入れたうえで、その動作の開始と未遂を示すのである。

#### 4.3. 派生名詞「カケ」

アスペクトを示す V-カケル / カカルについてもひとつ、姫野 (1999) に興味深い指摘がある。V-カケルには派生名詞カケの形があるが、V-カカルには無いということである。

- (42) : 作りかけ、読みかけ、縫いかけ  
x : 作りかかり、読みかかり、縫いかり

姫野 (1999) では説明されていないが、この理由も、V-カケルは動作のゴールを動作が完了した時点で設定し、V-カカルは動作が開始した時点で設定するという相違によって説明できると思う。

派生名詞カケは、具体的な動作が、開始はしているが途中の段階で留まっていて完了していない状態を示す。つまりこれまでに述べてきた、始動態の、意志性の継続動詞で動作の完了の時点がはっきりしている V-カケルを名詞形にしたものなのである。この用法は V-カカルにはない。

また、派生名詞カケは継続動詞だけではなく瞬間動詞にも表れる。

- (43) : 壊れかけ、終わりかけ  
x : 壊れかかり、終わりかかり

このときの「壊れかけ」は、瞬間動詞の「壊れる」を、壊れているかいないかという二元的ではなく、壊れていない状態から完全に壊れた状態へという段階的に捉えて、完全に壊れた時点ゴールとしている、いわば瞬間動詞を継続動詞的に使った例である。段階を捉えることができない瞬間動詞は派生名詞にはできないので、「\*届きかけの手紙」「\*置きかけの本」などは言えない。また、段階を捉えられる瞬間動詞でも、その状態に留まっている必要があるので、「\*落ちかけのボール」などとは言えない。

なお、「行きがけ、帰りがけ、出がけ」のように移動の動詞について連濁が生じている場合は、「~する際に」「~する途中で」という意味になり一語化した感じが強くなることが姫野 (1999) で指摘されている。

#### 4.4. 瞬間動詞とカケル / カカル

アスペクトとして使われるカケル / カカルは、まずその動作がどの時点をもって実現で

あるかというゴールを設定してから、設定したゴールに到達する手前であるという未遂の意味を示す働きをする。瞬間動詞につくと、動作が実現の一步手前であるという意味になる。金田一 (1976b) ではこのアスペクトを「将現態」と呼んでいる。将現態の V-カケル / カカルは、シヨウトスルやシソウダに言い換えることができる。

瞬間動詞につく V-カケルと V-カカルには、継続動詞につくときと同様、「動作の実現の時点」を、V-カケルは動作が完了した時点で設定し、V-カカルは動作が開始した時点で設定する」という違いがある。瞬間動詞は継続動詞と違って、動作の開始と完了は同時に起こるので、V-カケルと V-カカルに表面的な意味の違いは表れない。そのため、形式的にはカケルとカカルどちらを使ってもいいことが多い。

- (44) 火が消えかける / 火が消えかかる

姫野 (1999:137) で、アスペクトの V-カケル / カカルの形式について、「カカルはすべてカケルに言い換えられるが、その逆は成り立たない。またどちらも結合する場合はカケルのほうが安定した感じを与える」という指摘がされている。

しかし、よく観察すると、瞬間動詞の場合でも、V-カケルと V-カカルに意味の違いがある。V-カケルのほうが V-カカルよりも動作が実現の段階に近い感じを与える。佐治 (1992:20) にも、「同じ将現態を示す場合にも、V-カカルは主体の動きを客観視してとらえるのに対して、V-カケルは主体の側に立って、継続的な動きの中で捉える」という指摘がある。

このような意味の違いが表れる原因も、V-カケルが動作のゴールを完了の時点で設定し、V-カカルが動作のゴールを開始の時点で設定するためである。V-カケルは、動作の完了を視野にいれた上でその未遂を示す性質を持つアスペクトであるので、V-カケルはその動作が開始から完了まで進んでいく継続的な状態の途中であるという主観的な意味を示す。しかし V-カカルは動作の開始がゴールであるので、そこから完了に進んでいく段階であるというよりも、客観的に一瞬だけをとらえて、その動作が実現の寸前であることを示す傾向がある。

話者の気持ちとしては、動作の完了を期待しているときには V-カケルが、単に状況を描写するときには V-カカルが使われやすい。

##### 4.4.1. 意志性の動詞

瞬間動詞で意志性の動詞に V-カケル / カカルつくときは、能動態では、V-カカルよりも V-カケルが使われる場合が多い。

- (45) a. 太郎が次郎を殺しかける。

- b. \*太郎が次郎を殺しかかる。

動作主が動作の完了を期待しているときには V-カケルが、単に状況を描写するときには V-カカルが使われやすい。意志動詞は、主体の意志を含んだ動詞であり、主体は動作がそのまま完了まで進むことを期待している。(45)では、主体である太郎が次郎を殺してしまうという意志をもって動いている。そのため単なる状況描写の V-カカルよりも、主体的な V-カケルのほうがふさわしい。

ところが、能動態ではなく受動態になると、V-カカルも容認度が上がる。

- (46) a. 次郎が太郎に殺されかける。  
b. 次郎が太郎に殺されかかる。

意志動詞でも受動態になると、主体の意志を示さない。(46)では、主体である次郎は太郎に殺されるという動作が完了まで進むことを期待しているわけではない。次郎にとっては「殺される」というのは継続的な段階の一部ではなく瞬間的な状況なので、ここでは V-カカルを使ったほうがむしろ容認度が高いのである。

#### 4.4.2. 無意志性の動詞

瞬間動詞で無意志性の動詞には、V-カケルと V-カカルどちらでも使うことができる。

- (47) a. あの会社は潰れかけている。  
b. あの会社は潰れかかっている。

このときも、どちらかといえば V-カケルは主観的に動作の完了が期待されている途中の段階を示し、V-カカルは客観的な状況描写だけを行う傾向がある。例えば(48)では普通はカカルよりカケルを使う。

- (48) a. 宿題はもう終わりかけているから、遊んでも大丈夫だよ。  
b. ?宿題はもう終わりかかっているから、遊んでも大丈夫だよ。

これは、話者がその動作の完了を期待しているためである。アスペクトの V-カケル/カカルはともに動作の未遂を示すが、V-カケルのほうは、動作が中断しても、また戻って動作を再開すればそのまま完了に至るという感じが、V-カカルよりも強いのである。

逆に、話者が客観的な立場に立っているときは、V-カカルもかなり使いやすい傾向がある。

- (49) a. 植木鉢がベランダから落ちかけている。  
b. 植木鉢がベランダから落ちかかっている。

(49)はいずれも容認可能であるが、どちらかといえば(49b)のほうがより客観的・瞬間的な描写で、「植木鉢が落ちそうであぶない」という気持ちが表れやすい印象を受ける。それに対して、(49a)のほうは、植木鉢がベランダから最終的に落ちてしまうまでの段階を、継続的に見守っているような意味合いがある。

このようなことから、V-カケルは、瞬間動詞を継続動詞的に捉える、といえる。

- (50) a. そんな昔のことなんて、忘れかけていた。  
b. ?そんな昔のことなんて、忘れかかっていた。

「忘れる」は瞬間動詞とされているが、実際には、「忘れる」という事態が瞬間的に起こること、たとえば1秒前までは完全に覚えていたが現在はすっかり忘れてしまった、などということはまずない。だんだん記憶が薄くなり、最終段階になって「忘れてしまう」という結果になるのである。カケルは瞬間動詞である「忘れる」も継続的にとらえて、最終段階の「すっかり忘れてしまう」という時点で動作のゴールを設定しているようである。それに対して、カカルは単純に、瞬間動詞的に、忘れてるか忘れていないかの二択であり、その結果「忘れそうだったが忘れていない」という未遂の意味が強調されるのである。

アスペクトの V-カケルは動作の完了の時点でゴールを設定し、V-カカルは動作の開始の時点でゴールを設定する。瞬間動詞の示す動作はその名の通り瞬間的で、開始や完了といったはっきりした時点は持たないが、動作を継続的に捉えてその完了を視野にいれている文脈では V-カケルのほうが使いやすいという傾向がある。

#### 4.5. アスペクトの V-カケルと V-カカルの混同の問題

ここまでは、アスペクトの V-カケルと V-カカルの違いについて述べてきた。しかしその相違点は、あくまでそのような傾向がある、というだけにとどまり、常に観察されるわけではない。実際のところ、現代日本語において、アスペクトのカケル/カカルは、はっきりとした使い分けがなされているとは言えない。アスペクトの V-カケルと V-カカルは語形的に類似しており、とくに口語では混同される場合が多いのである。

その原因として、まず、V-カケルと V-カカルの意味の違いは、日常会話において無視できる程度の違いであるということがあげられる。繰り返し述べてきた通り、V-カケルは動作の完了を視野に入れて継続的な状況の中の一段階として動作の未遂を示し、V-カカルは客観的・瞬間的に、単純に動作の未遂を示す。このとき話者が重点を置いて伝えようとし

ているのは「動作の未遂」のほうであって、それが主観的か客観的かなどは、問題にされない。V-カカルと言ったほうがより適切な文脈においてV-カケルと発話しても、日本語として問題はない。アスペクトのV-カケル/カカルは、他動詞にはV-カケル、自動詞にはV-カカルが接続しやすいものの、本来の自動詞と他動詞の対立はほぼ失っているといっ

てよい。また第2節で述べた語彙的な用法と語形が重なるのを回避するために、意図的にどちらかを選ぶ場合もある。例えば、ここまで意志性の動詞にはV-カケルが接続しやすいと述べてきた。ところが、「話す」は意志性の動詞であるにもかかわらず、V-カカルのほうが文の容認度が高い。

- (51) a. ??太郎は花子の大事な秘密を、次郎に話しかけた。  
b. 太郎は花子の大事な秘密を、次郎に話しかかった。

これは、「話しかける」という語形が語彙的な用法にも表れるためであると推測できる。アスペクトのV-カケル/カカルより語彙的なV-カケル/カカルのほうが、前項動詞と後項動詞の語彙的なつながりが強く、意味が優先される。そのため、「話す」にアスペクトのV-カケル/カカルをつけて発話しようとするとき、わたしたちは語彙的な「話しかける」と誤解されるのを避けようとして、あえてV-カカルを選ぶのではないだろうか。

語彙的な用法とアスペクトの用法の両方に数多く出現するのは、複合動詞V-カケル/カカルの大きな特徴であるが、その特徴が、アスペクトのV-カケル/カカルの混同を助長する結果になってしまっているようだ。

また、金田一(1976b)や森田(1977)など30年近く前の研究では始動態のV-カカルは容認されていないが、最近の研究で姫野(1999)などでは始動態のV-カカルはそれほど容認度が低くないとされている。筆者個人の感覚でも、意志性の継続動詞で動作の完了の時点がはっきりしている動詞ではV-カカルは不自然だが、無意志性の継続動詞や動作の完了の時点がはっきりしない継続動詞では、V-カカルも始動態の意味で容認可能である。カケルとカカルの意味の混同は、若い世代ほど進んでいるようである。

## 5. おわりに

以上、複合動詞V-カケル/カカルについて考察してきた。アスペクトを示すV-カケル/カカルについて、本稿で新たにわかったことを挙げると、以下のようになる。

- (52) a. アスペクトのV-カケル/カカルは、語彙的な複合動詞V-カケル/カカルとは文法的に異なる性質を持つ。  
b. アスペクトのV-カケル/カカルは、動作のゴールを設定し、動作がそのゴールに達していないという未遂の意味を示す。V-カケルはゴールを動作の完了の時点に設定し、V-カカルは開始の時点に設定する傾向がある。  
c. 動作の完了の時点のはっきりした意志性の継続動詞について始動態を示せるのはV-カケルだけである。また、瞬間動詞を継続動詞的にとらえるのも、V-カカルにはないV-カケルの特長である。そのため、派生名詞カケの用法は、V-カカルにはない。  
d. 現代日本語においては、その語形と意味の類似性、語彙的な複合動詞との判別などの理由から、アスペクトのV-カケルとV-カカルは混同が進んでいる。したがって、以上で指摘した相違点は、一般的にいえる傾向ではあるが、例外なく適用できるわけではない。

従来の研究では、始動態のV-カケルと将現態のV-カケル/カカルは別のアスペクトとして考えられてきたが、本論文では、いったん始動態・将現態という枠から離れて、どちらにも共通する「未遂」の意味に注目し、アスペクトのV-カケル/カカルを観察することを試みた。

その結果、アスペクトのV-カケル/カカルは、必ずしも将現態と始動態どちらかに分けられず、どちらでも解釈できる場合もあること、そして、V-カケル/カカルが始動態・将現態・もしくはその両方のどれになるかは、文脈によって決定されていることがわかった。そして、アスペクトのV-カケル/カカルが、動作のゴールを設定した上で、動作がそのゴールに達していないという未遂の意味を示す点は、動詞や文脈によって変わらない。また、V-カケルはゴールを動作の完了の時点に設定し、V-カカルは開始の時点に設定するという性質の違いも、一般的にいえることである。さらに、その性質の違いが原因で継続動詞では始動態が発生するようだということや、また瞬間動詞につくときでも、V-カケル/カカルの性質の違いは残っているらしいことも明らかになった。

## 謝辞

本論文の執筆にあたって、多くの方にお世話になりました。なにより、貴重なお時間をさいて温かく適切なお指導をしてくださった上山あゆみ先生に、この場を借りて、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。また、頼りになる相談相手として様々な面でご助力をいただいた九州大学言語学研究室の皆様をはじめ、ここまで励まし見守ってくださった全ての方々に、重ねて感謝の意を申し上げます。

## 参考文献

- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房
- 金田一春彦（1976a）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』5-26.東京：むぎ書房
- 金田一春彦（1976b）「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』27-61. 東京：むぎ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』東京：ひつじ書房
- 宮島達夫（1972）『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』東京：秀英出版
- 森田良行（1977）『基礎日本語 意味と使い方』東京：角川書店
- 新美和昭, 山浦洋一, 宇津野登久子（1987）『複合動詞（外国人のための日本語例文・問題シリーズ』（名柄迪監修）東京：荒竹出版
- 西尾寅弥（1978）「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」『国語と国文学』651:173-186. 東京大学国語国文学会
- 佐久間鼎（1966）『現代日本語の表現と語法』東京：恒星社厚生閣
- 佐治圭三（1992）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』東京：ひつじ書房
- 寺村秀夫（1969）「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト その一」『日本語・日本文化』1:32-48. 大阪外国語大学研究留学生別科
- 吉川武時（1976）「現代日本語のアスペクト研究」『日本語動詞のアスペクト』155-323.東京：むぎ書房